The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドームによるケンペル『日本誌』の編集について(2) : 第1巻の分析（その2）
Author(s)	中, 直一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2012, 12, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について（2）

― 第１巻の分析（その２） ―

中　直一

１　はじめに

本プロジェクト前号で筆者は、ドーム版ケンペル『日本誌』において編者ドームが与えた脚注に着目し、そこに示されていた所謂「伯父の原稿」、「甥の原稿」およびショイヒツァー英訳版の記載内容・表記等の異同に関する情報をもとに、ドーム版の再評価を開始した[1]。『日本誌』第１巻新第１章においてドームは多数の脚注をつけているが、そのうち４つは、「伯父の原稿」「甥の原稿」および英訳版についてのものであった（以下本論文では、ドーム版の脚注のうち上記３者の異同についての記載を含む脚注を「文献学的脚注」と呼ぶことにする）。前号で筆者は、その４つの文献学的脚注すべてについて検討を終え、さらに第１巻新第２章における３箇所の文献学的脚注のうち１つについても調査を完了した。それによって得られた暫定的結論は、

①ドームのいう「伯父の原稿」は、少なくとも第１巻新第１章に関しては、ロンドン原稿の写しであり、ドーム版のドイツ語文は、これと「甥の原稿」に基づき構成されたものである

②ドーム版第１巻新第１章は、ショイヒツァー版をドームが独訳したものではない

③ドームの言う「甥の原稿」のうち、新第１章の部分は、ロンドンから送られた原稿を甥が清書したものと推測しうる

というものである。

本号においては第１巻新第２章の残る２つの文献学的脚注および新第３章から新第７章までについて検討を進め、上記の暫定的結論の再吟味を行いたい。

２　ショイヒツァー版にのみ見られる記載の相違

本論文で取り扱う新第２章から新第７章において特徴的な点は、ドーム版とロンドン原稿の記載が一致し、ショイヒツァー版にのみ記載の相違が見られるというものが３つ存在するという点である。

《第１巻新第２章　シャムの官位についての注》

ドーム版第１巻新第２章脚注における残る２つの文献学的脚注のうちの１つにおいて、ドームは自分が使用する底本（レムゴ原稿）とショイヒツァー版の相違を指摘している。あらかじめ結論を述べるならば、ドーム版の記載（したがってその底本となったレムゴ原稿の記載）とロンドン原稿の記載が一致

し、ロンドン原稿に基づくものであった筈のショイヒツァー版が、むしろロンドン原稿の記載と異なっている。つまりショイヒツァー版のみに記載の相違が見られるのである。

それはシャムの官位を説明した部分に施された脚注で、ここでドームはシャムの官位の綴りが自己の底本（レムゴ原稿）とショイヒツァー版で異なっていると指摘している。シャムの官位の綴り方に関する事柄なので、本論文ではドーム版の当該箇所のコピーを掲載する（原文では官位を示す単語の後に、それらの官位の説明が続くが、以下の部分では、官位を示す単語のみを抜き出す。なおドーム版はいわゆる亀の甲文字なので、引用箇所に普通の字体も示す。

Luang　Okuun　Omuun　Majulaks　(Dohm I, S.34)

Luang　Okuun　Omuun　Majulaks

ドームはここに脚注をつけ、次のように記している。

*) Scheuchzer hat bei diesen Namen kleine Verschiedenheiten. Die Luang heißen bei ihm Lung; die Okuun, Okucen; die Omuun, Omucen; die Majulaks, Majalaks.　(Dohm I, S. 34, Anm.)

訳文：これらの名称についてショイヒツァーでは小さな相違が見られる。そこでは Luang は Lung に、Okuun は Okucen に、Omuun は Omucen に、Majulaks は Majalaks になっている。

ドームは、自分の手元にある原稿における綴りと、ショイヒツァー英訳版における綴りが異なっていることを指摘している。

ところで実際にショイヒツァー版を見ると、上記４単語のうち、２つに関してはドームの指摘通りだが、残る２つについては、ドームの注記のようになっていない。念のために、上記４単語全てを、ショイヒツァー版より引く（当該部分のコピー図版）。

Luang　Okucen　Omucen　Majalacks　(Scheuchzer, p.25)

この４単語のうち、Okucen および Omucen はドームの脚注における記載と同じである。ところが、Luang についてドームは既述のように「Luang は Lung に……なっている」と述べていた。実際にはショイヒツァー版においては Lung とは記載されておらず、むしろドーム版と同じ Luang という綴りが記載されている。また Majalacks についても、ドームはショイヒツァー版において Majalaks になっていると記しているが、実際のショイヒツァー版では語尾が cks（つまりドームの脚注にはない c が加わった形）になっている。

これら２つがドームの転記ミスによるものなのか、それともドームが依拠した英訳版と筆者が引用している英訳版とが異なる版本なのか、あるいはドーム版植字工の誤植なのか、理由ははっきりしない。いずれにせよ我々としては、ドームが「英訳本では云々となっている」と述べている場合、実際に英訳版における記載を確認しておく必要があるということを注意しなければならない。

それではHeutiges Japan ではどうであろうか。これも当該部分のコピー図版の形で示す。

Luang Okuun Omuun Majulaks (Heutiges Japan, S.15)

このように、すべてドーム版の綴りと一致することがわかる。

以上をまとめると次のようになる。

レムゴ原稿（推測）	Luang	Okuun	Omuun	Majulaks
ドーム版	Luang	Okuun	Omuun	Majulaks
ドームの記載におけるショイヒツァー版	Lung	Okucen	Omucen	Majalaks
実際のショイヒツァー版	Luang	Okucen	Omucen	Majalacks
ロンドン原稿	Luang	Okuun	Omuun	Majulaks

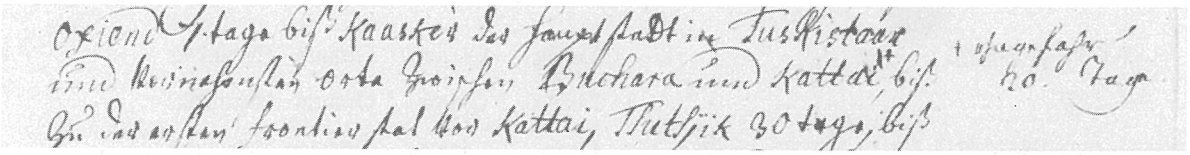
まず注目すべきは、ロンドン原稿を自らまとめたショイヒツァーの英訳版の綴りが、ロンドン原稿と異なっている、という点である。そしてショイヒツァーの英訳の綴りとレムゴ原稿の綴りの異同を脚注で紹介したドームも、ショイヒツァー英訳版の綴りを正確に転記していない。つまりショイヒツァーにもドームにも記載ミス・転記ミス（あるいは印刷の際の誤植）があったのだが、最終的にはロンドン原稿とドーム版の綴りが完全に一致していることが確認し得る。ドームはロンドン原稿を参照し得なかったのであり、参照し得たのはレムゴ原稿（「伯父の原稿」および「甥の原稿」）のみである。一方ロンドンに現存する原稿の内、新第２章は（本論文前号で論じたショイヒツァーの追記部分を除き）、甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルの筆跡である。ドーム版の綴りとロンドン原稿の綴りが一致し、ロンドン原稿を英訳したはずのショイヒツァー版のみ綴り字が異なっているという事態は、極めて不可解である。

《第１巻新第６章　旅程の数字への脚注》

新第6章には合計4つの文献学的脚注がある。その4番目は、オキシェンドからカスケルまでの距離について、ドーム版では20日の行程と記されている箇所に付されている。ドーム版本文では „Von da bis Kaasker, der Hauptstadt in Turkestaan und dem vornehmsten Orte zwischen Buchara und Kattai ohngefehr 20 Tage.“(Dohm I, S.105)となっている。引用文中の daは、地名 Oxiendを受ける。この文に付された脚注でドームは「ショイヒツァーの手許にあった原稿ではこの数は脱落している」(Dohm I, S.105, Anm.)と述べている。この部分は、ショイヒツァー版では、” … thence to *Kaasker* the Capital of *Turkistaan*, and the chief Town between *Buchara* and *Katai*[2], in (*this number was omitted in the original*) days, …” (Scheuchzer, p.89)と記されている。すなわち、ショイヒツァーは、訳文の本文中に括弧付きイタリック体で注記を加え、自らが参照した原稿において数字が脱落していると述べているのである。

ショイヒツァーの書き方を見ると、ロンドン原稿においてはもともと数字が記されていなかったように読めるが、ショイヒツァーが依拠したロンドン原稿では、意外なことに 20 という数字が明記されている。すなわち ロンドン原稿では„ … biß Kaasker der haupt stadt in Turkistaan und vornehmsten orte zwischen Buchara und Kattai ohngefahr 20. Tage, …“(Heutiges Japan, S.73) と記されている

のである。この箇所に付された脚注によれば„Kattai ohngefahr 20. Tage] Kattai *marg. dext.* <ohngefahr 20. Tage>“(Heutiges Japan, S.73, Anm.)、すなわちKattaiという語が記された欄外にohngefahr 20. Tage(約20日)と記されていることがわかる。この箇所を、その前後の部分も含めて現物(マイクロフィルム版)で確認すると、次のようになっている(Sl 3060 fol.78r)。



oxiend 7. tage, biß Kaasker der haupt stadt in Turkistaan
und vornehmsten orte zwischen Buchara und Kattai*, biß　　* ohngefar
zu der ersten Frontier stat vor Kattai, Tsutsjik 30 tage, biß　　20. tage

ロンドン原稿の新第6章の筆跡は「筆写人1」のものである。従って、ケンペル本人が書いた原稿を、第3者である筆写人1が筆記する際に写し間違いがあり、あとで筆者人1自身が気付いて欄外に追記を行ったという推測が成り立つ。

もしそうだとすると、逆に理解に苦しむのが、ショイヒツァーの発言である。ショイヒツァーが英訳する際に参照した原稿では「約20日」という部分が脱落していたのではなく、上に引用したように「20」という数字のみが脱落していたとされる。これは、ロンドン原稿の実態と異なった発言である。

上に見たように、第1巻新第2章において、ショイヒツァー版にのみ記載の相違が見られるという実例が存在した。そこではシャム王国の官位の綴り字に関し、ドーム版とロンドン原稿が一致し、ロンドン原稿に依拠しているはずのショイヒツァー版のみ綴り字が異なっていた。今論じている20という数字の脱落云々に関しても、ドーム版とロンドン原稿が一致し、ショイヒツァー版のみ20という数字が脱落している。まだ単なる推測の域を出ないが、ショイヒツァーが翻訳の実務に当たる際、必ずしもロンドン原稿を座右においていたとは断言できず、ひょっとしたらロンドン原稿をさらに筆写した別の原稿があったのかも知れない。翻訳をする際、原文を見ただけですぐに別の言語に翻訳しうる達人も居るだろうが、多くの場合、訳文を作成するために、オリジナルの原文に訳語を記入したり、様々な訳文作成の為の書き込みを行うことは、よく見られることである。ロンドン原稿には、そうした形跡がほとんど見られない。オリジナルの原稿として大切に保管され、それとは別途、翻訳実務上の写しが作られた可能性も排除出来ない。そしてその際、筆写した人が数字のみ転写し忘れ、ショイヒツァーが脱落したままの原稿に基づいて自己の訳文を作成した――このような推測も成り立ちうるのではないか。

《第1巻新第7章　日本人の起源に関する脚注》

新第7章は日本人の起源を論じた章である。この章においては、文献学的脚注は1つのみである。ケンペルは日本においてかなり古い時代から日本人が居住していたという見解を示した後、それとは異なる2つの見解――すなわち、日本人がどこか他の大国からそのまま民族移動して日本国を建設したという見解と、突如日本列島の地中から日本民族がわき出てきたという見解――を紹介し

て、自分の見解とは異なる2つの見解について「両方の意見とも、見ての通り、笑うべきものである」(Beide Meinungen sind, wie man sieht, lächerlich)(Dohm I, S.117)と述べている。そしてドームはこの箇所に脚注をつけ、英訳版ではこの部分が少し別の表現になっていると指摘している。すなわち「英訳は、この箇所で、この2つの見解の価値を、多少ともより明確に、そしてより決定的に表現している。英訳は、1つの見解は笑うべきものであり、もう1つの見解はありえない、としているのである」(Die eine, sagt sie[3], sey lächerlich, die andere unwahrscheinlich.)(Dohm I, S.117, Anm.)。つまりドームが依拠した原稿では、2つ見解がともに「笑うべきもの」(lächerlich)とされていたのに対し、英訳では、2つの見解のうち1つが「笑うべきもの」(lächerlich)であり、もう1つが「ありえない」(unwahrschieinlich)とされている、とドームは注記しているのである。

この箇所のショイヒツァー英訳版は"... which is either impertinent or improbable"(Scheuchzer, p.101)となっている。つまり2つの見解は「不適切か、あるいはありえない」ということになっており、ドームが指摘するように、一方が何々で他方が何々、という区分けはしていない。刊本『今日の日本』では、当該の箇所は„Welches beydes[4] zu belachen"(Heutiges Japan, S.82)となっている。つまりドーム版と同じように、2つの見解をまとめて、「笑うべきもの」(zu belachen)と記している。

このことから分かるように、ショイヒツァーの英訳がロンドン原稿とは多少違う表現を採用しているのに対し、ロンドン原稿を参照し得なかったドーム版が、ロンドン原稿に近い表現になっていることが確認できるのである。

3　ドーム版脚注における特異な記述（第１巻新第２章）

第１巻新第２章においてドームが施した脚注の中に、ドーム自身の錯誤か、あるいはドームが参照していた英訳版が、通常のショイヒツァー版とは異なっていたのではないか、と思わせる特異な記載がある。

それは上に検討したタイの官位についての部分と同じページに見られるもので、そこにドームはもう１つの脚注をつけている。それはドームの本文で „Opera, deren etwa vierzig oder auch mehr bei Hofe und im Lande sehn mögen, sind ohngefehr das, was bei uns Baronen" (Dohm I, S.33)となっている箇所である。この部分の意味は「プラ(Opera)は宮廷および全国で40人余りおり、われわれのところの男爵に相当する」（今井訳上巻、p.35）であるが、ドームはこの箇所に脚注を施し、„Scheuchzer aber läst Kämpfer sagen, Opera sei so viel als unser Herzog oder Graf"(Dohm I, S.33, Anm.)、すなわち「ショイヒツァーは、しかしながら、Operaがわれわれの公爵ないし伯爵に相当するものだとケンペルに言わしめている」（拙訳）と述べている。

問題は、ドーム版で„Opera, ..., sind ohngefehr das, was bei uns Baronen"となっている箇所の最後の名詞Baronenが、ドームの指摘によれば、ショイヒツァー版でHerzog oder Grafとなっている、という点である。Baronは「男爵」であり、いわゆる「公侯伯子男」の位階では一番低く、一方Herzog「公爵」、Graf「伯爵」は、爵位としては高い。ドームはこの相違を問題にしているのである。

ショイヒツァー版は英語であるから、ドームはショイヒツァー版の英語語彙をドイツ語に訳した上で、

脚注において自己の底本（レムゴ原稿）とショイヒツァー版英訳の異同を問題にしているのだが、当のショイヒツァー版では、当該の箇所は 、実は"...are like Lords or Barons" (Scheuchzer, p.25)と記されている。

英語の lord の位階は微妙で、研究社『新英和大辞典』では lord の訳語・説明として「**3 a** (Lord の敬称を持つ)英国の貴族、華族(peer). **b** 男爵(baron). **c** 侯爵(marquis)・伯爵(earl)・子爵(viscount)の世襲貴族. **d** 公爵(duke)・侯爵の子息または伯爵の長子」との記載がある[5]。要するに lord は、爵位として高い「侯爵」から、爵位として低い「男爵」までも包摂しうる、かなりあいまいな概念である。そしてショイヒツァー版では、こうした概念である lord が、"Lords or Barons"という風に、Barons と併置されている。

もしもショイヒツァーの言う Lords を、幅広い概念と考えずに、上記英和辞典の訳語の１つとして記載されている「侯爵」のみを表すものと解釈すると、"Lords or Barons"の部分は、爵位として最も高い「侯爵」が、爵位として最も低い「男爵」Barons と併置されたこととなり、通例の解釈としては存在しがたい。従って、Lords は貴族一般を指す概念であると理解し、その Lords が or によって Barons と併置されていることから、ここでは仮に、ショイヒツァー版の"Lords or Barons"を「貴族、言い換えれば男爵」という意味であると解釈しておきたい。すなわち、ショイヒツァーの解釈では、タイの高官の地位をあらわす称号としての Opera が、イギリスの「貴族」に相当するものであると説明し得るのであり、さらに詳細に説明すると貴族の中でも低い方の「男爵」に相当すると考えて、"Lords or Barons"という訳語を与えたと想像されるのである。

問題はこの"Lords or Barons"が、ドームが脚注で訳したようにドイツ語の„Herzog oder Graf"に相当するかどうか、という点である。仮に"Lords or Barons"を、上記の解釈のように、イギリスの爵位で低い方であるという意味での「貴族、言い換えれば男爵」であると仮定すると、これがドイツの„Herzog oder Graf"すなわち「侯爵あるいは伯爵」という、高い爵位に相当するとは到底考えがたい。ショイヒツァーが使用する語彙のうち、解釈に幅の余地のある Lords はともかくとして、Barons の方は含意が明確であり、これをドイツ語の Baronen という風に理解せずに、あえて„Herzog oder Graf"と理解したドームの真意は非常に理解しがたい。

ショイヒツァーが翻訳の底本としたロンドン原稿では、当該の箇所は"sind wie Baronen"(Heutiges Japan, S.15)となっており、ショイヒツァーはドイツ語原稿の Baronen を Lords or Barons と訳したと考えられる一方、レムゴ原稿でも Baronen という語彙が用いられていたと推測しうる。さればこそドーム版の本文では、上に紹介したように、"Baronen"という語が翻刻されていたのである。それだけになおさら、ドーム版の脚注内容の異様さが目につく。

ここから先は、もはや推測の域を出ないのだが、ドーム版の脚注で「ショイヒツァーは、しかしながら、Opera がわれわれの公爵ないし伯爵に相当するものだとケンペルに言わしめている」と記載されている理由としては、次の２種の、方向性の違うものが考え得る。

第１は、ショイヒツァー版に異なる版本があり、ドームが対校に使用していたショイヒツァー版と、筆者が参照しているショイヒツァー版に異同があった、という可能性である。仮に異なる版本があり、ドームが使用していたショイヒツァー版では"...are like Lords or Barons"ではなくて、たとえば "...are

like Dukes or Earls”と記載されていたと仮定すると、ドームの脚注が違和感なく読める。ショイヒツァー版に異本があったかどうか調べるために筆者はBritish Libraryのインターネット版蔵書目録*Integrated Catalogue*を調査したが[6]、ショイヒツァー訳ケンペル『日本誌』は1727年の1種類しかなかった。またショイヒツァーによる英訳版出版の経緯を調査したミヒェルの論文においても、異本の存在は確認できなかった[7]。さらにショイヒツァー英訳版からの重訳であるオランダ語版を見ると、そこには当該の箇所が”Baronen en Vryheeren”[8]（ドイツ語に直訳するならば”Baronen und Freiherren”となろう）と記載されており、オランダ語版の底本となったショイヒツァー版の記載においても”Barons”の語が使用されていたことが推測しうる。すなわち、オランダ語訳の訳語を見る限り、ショイヒツァー版に異本があったとは断言し得ないのである。

第2は、英語のBaronsとドイツ語のBaronenが同じ含意ではない、という可能性である。これはきわめて苦し紛れの解釈であるが、仮に英語のBaronsが「伯爵」を表すものであり、他方ドイツ語のBaronenが低い爵位をあらわすものであるとすると、ショイヒツァーの言う”…are like Lords or Barons”も、上に筆者が仮に示したような「貴族、言い換えれば男爵」ではなく、むしろ「侯爵あるいは伯爵」と訳しうることになる。そうであると仮定すると、ドームの脚注も辻褄があう。ただしこの第2の解釈は、「英語のBaronsはドイツ語のBaronenと等価ではない」という前提に立つものであり、非常に苦しい解釈である。筆者はヨーロッパの爵位について若干調査を試みたが、国・地域により、また時代により、爵位の制度が非常に異なること、また称号の含意にも変遷や相違のあることは分かったが、英語のbaronとドイツ語のBaronの含意に相違があるかないか等についての詳細な情報を得ることは出来なかった。

ドームの脚注を調査した結果、判然としない面も多々残されたが、本稿の当初の目的である「ドーム版編集の学術的価値」の観点から考察すると、ドームは英訳を参照しつつも、手許にあるレムゴ原稿をもとに自らの版本を作成したことが分かる。そして当該の箇所の表現は、ロンドン原稿と一致しており、ドームがショイヒツァーの英訳をドイツ語に重訳して自らの版本を作成したという可能性は否定されるのである。

4　第1巻新第3章から新第6章まで

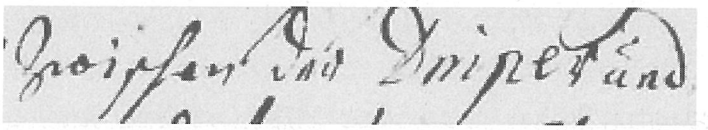
新第3章から新第5章までは文献学的脚注はない。なぜこの3つの章において文献学的脚注が存在しないのか。普通に考えれば、ショイヒツァー版とレムゴ原稿を対比したドームが、そこに何らの異同を発見しなかったから、と言えるのだが、すこしうがった見方をすれば、これら3章についてはレムゴ原稿が存在せず、従ってショイヒツァー版との対比作業が行い得なかったとの解釈もあり得る。現存するロンドン原稿においては旧第2章（新第3章に相当）の全体および旧第3章（新第4章）の途中までの筆記者は甥ヨハン・ヘルマンであり、旧第3章（新第4章）の途中以降第1巻の終わりまで筆写人1が筆記している[9]。仮にロンドン原稿において、旧第2章（新第3章）から旧第4章（新第5章）までの部分のみ、筆写人がその他の部分と異なっていれば（たとえばエンゲルベルト・ケンペル本人が筆記したものであれば）、その部分に相当するレムゴ原稿が無かったかも知れない（なぜならエンゲルベルト・ケンペル本人が書いた原稿がロンドンに送られ、一方レムゴでは写しを取る作業が行われていなかった

から）、との推測が一応は成り立つ。しかし上に見たように、新第３章から新第５章に当たる部分のみが、他の部分と異なる筆記者によって筆記されていたというわけではないから、この部分に関してレムゴ原稿が存在しなかったという推測は極めて根拠に乏しいものと言えよう。

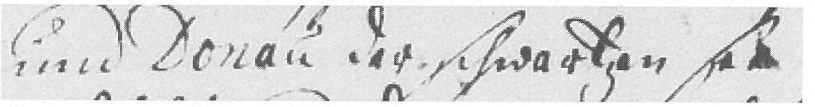
以下に、新第６章を検討する。新第６章は日本人の起源を論じた章であるが、ここには文献学的脚注が４つある。そのうち第４番目のものについては、すでに論じた（本論文第２節「ショイヒツァー版にのみ見られる記載の相違」を参照）。本節では残る３つについて検討を進める。いずれも、日本人の起源を論ずる前段階として書かれた、トルコから中国に至る地域の民族分布や民族移動について論じた部分に付された脚注である。

第１は、クリミヤのタタール人について述べた部分で、そこの本論部分には、彼らがドニエプル川とドン川の間の黒海沿岸に(am schwarzen Meere zwischen dem Dnieper und Don)(Dohm I, S.103)住んでいる、と紹介され、このDonに対して次のような脚注が付されている。「私の原稿のひとつ（すなわち伯父の原稿）では、ここがDonauとなっており、ショイヒツァーも、彼の版でそのような読みをしている。しかしそれは明らかに誤記である。なぜならクリミヤ・タタール人はドニエプル川の左岸ではなく右岸に、すなわち、ドニエプル川とドン川の間に住んでいるからである」(Dohm I, S.103f. Anm.)。つまり、伯父の原稿でもショイヒツァー版でもDonauと記されている箇所を、ドームはDonと訂正したのだが、その際それが事実関係に基づいて誤記を訂正したという注記の仕方をしており、甥の原稿に基づいたとは書かれていないし、そもそも甥の原稿への特段の言及がない。

ショイヒツァー版では、当該箇所は"between the *Dniper* and *Danube*, upon the coats of the Black Sea" (Scheuchzer, pp.88-89)と記されていて、ドイツ語式のDonauではなく、英語式のDanubeという表記が用いられているが、内容的には、ドームの脚注に述べられている通りの記載が見られる。ショイヒツァー版が依拠したロンドン原稿では、当該箇所は„zwischen der Dniper und Donau der schwartzen see"(Heutiges Japan, S.72)と記されており、そこに編者による脚注が施されて「2つの誤記。本来ならば、zwischen der Dniper und Don an der schwartzen seeとなる筈である。ドームはDonauが誤記であることを指摘している。彼はそれをケンペルの原稿にのみ見いだしたのであり、甥の原稿では見いださなかった」(Heutiges Japan, S.72, Anm.)と記されている。ここで言う「2つの誤記」とは、DonをDonauと記していること、および前置詞anが脱落していることをさす。念のため、ロンドン原稿を見ると、以下のようになっている(Sloane 3060, fol. 77v)。



zwischen der Dniper und



und Donau der schwartzen see

本論文の話の筋からはずれるが、刊本„Heutiges Japan"ではundが１つしか翻刻されていない。マイクロ・フィルム版で見ると、undが重複して記されているように読める。それはともかくとして、ロンドン原稿でもDonauと記されていて、これはどう見てもDon anとは読めない。仮にDon anと読めるとす

ると、Dniper und Don an der schwartzen see という、„ Heutiges Japan “の脚注で示された、本来あるべき記載になるのだが。

以上をまとめると、ショイヒツァー版も伯父の原稿も、本来あるべき Don ではなく、誤記である Donau が記載されているが、「甥の原稿」でどうなっていたのかについては、ドーム版に明確な記述がない、ということになる。

第2の文献学的脚注は、出自がウズベクのスキタイ族である皇帝や王族を紹介した部分、すなわち„und selbst der große Mogul, die ottomannischen Kaiser und die sophischen Könige sind dieses Geschlechts“(Dohm I, S.104)(そして大モンゴル、オットマンの皇帝たちおよびソフィスの王たちも、この種族である)の sophischen に付されている。当該箇所への脚注においてドームは「この語は私の両方の原稿において、少し不明瞭に書かれている。推測するにショイヒツァーも、彼の手許の原稿において同様であったようで、それゆえ King of sopra と記した。しかし私は、十分な理由をもって以下のように推測しうる。すなわちケンペルの念頭にあったのは、ペルシャの Sophis の君主をおいて他にはない、なぜなら他の文書から知られるように、ケンペルはこの王族がトルクメン出身であると述べているのであり、それゆえ当然のことながら、彼がここでも同じ王族を想起しているに違いないからである」(Dohm I, S.104, Anm.)と述べている。すなわち、ショイヒツァー版で sopra と記されている王族は、Sophis を指すと述べているわけである。

ここでドームは、「伯父の原稿」及び「甥の原稿」の両方において、sophischen の部分が「少し不明瞭に書かれている」(etwas undeutlich geschrieben)と述べているのみであり、手許の原稿において sophischen と書かれていたから自己の版でもそのように翻刻したとは述べていない。ドームはあくまでも他の文献(ケンペルの『廻国奇観』を指す)に基づいて、不明瞭な手書き文字を sophischen と読んだのである。

ショイヒツァー版を参照すると”King of *Sopra*”(Scheuchzer, p.89)と記されている。ドームの脚注では sopra という風に頭文字が小文字であるが、実際のショイヒツァー版では頭文字が大文字になっている。そのような細かな違いはあるが、大きな点ではドームはショイヒツァー版をそのまま転記した上で注釈を作成していると言える。この箇所を刊本„Heutiges Japan“で見ると、„der Sophische König“ (Heutiges Japan I, S.73)となっており、編者によって „ *Korrigiert aus*: Soprische“ (ibid. Anm.)、すなわち「Soprische より訂正」と記されていて、ロンドン原稿においてはもともと Soprische と記されていたことが分かる。この脚注には、Soprische を Sophische に校訂した理由などは一切書かれていない。

いずれにせよ、ロンドン原稿でははじめから Soprische と書かれていたわけで、ショイヒツァーはそれを忠実に英語式表記に移したにすぎないことが分かる。レムゴ原稿については、上に引用したようにドーム版の脚注で「不明瞭に書かれている」としか記されていないが、ひょっとするとロンドン原稿同様レムゴ原稿でも(不明瞭な書き方ながらも)soprischen と書かれていたかも知れない。そうだとすると、ドームは、ケンペルがかつて『廻国奇観』で Sophis を論じていたという知識に基づいて soprischen を sophischen に訂正したということになる(丁度、Heutiges Japan の編者がそうしたように)。

第3の文献学的脚注は、17世紀の旅行家であるアンダソンの人名表記についてのものである。ドーム版では„Jürgen Anderson"(Dohm I, S.104)に脚注が付され、„nicht Jagen Andasen, wie die englische Uebersetzung hat"(Dohm I, S.104, Anm.)すなわち「英訳にあるようなJagen Andasenではない」と記されている。ショイヒツァー版の綴りが違っているとの指摘である。ショイヒツァー版の現物でも、実際に"*Jagen Andasen*"(Scheuchzer, p.89)と記されている。イタリック体になっているが、綴りそのものはドームの脚注における綴りと同じである。ドームの脚注には、伯父の原稿にも甥の原稿にも言及されていない。単に英訳版の人名表記との異同を示すのみである。この部分のロンドン原稿翻刻版は、„Jürgen Anderson"(Heutiges Japan, S.73)と、ドーム版と同じ綴りが示されているが、脚注において「Jagen Andasen より訂正。〔ショイヒツァーは Anderson を知らなかったようで、間違った書き方を踏襲している(HJ, Band 1, S.89)。ドームは訂正しているが、これは正当である(GBJ, Band 1, S.104)」[10](ibid. Anm.)との注記が見られる。つまりロンドン原稿において人名表記に間違いがあり、それをショイヒツァーはそのまま踏襲したが、ドーム版でも Heutiges Japan 版でも、それを正しい人名表記に改めている、ということである。

第3の文献学的脚注においてドームは手許の原稿について何ら言及していないので、レムゴ原稿において当該の人名がどのように綴られていたのかは不明のままである。ドームは脚注をつける際、レムゴ原稿(伯父の原稿、甥の原稿)とショイヒツァー版に異同があった場合は、煩を厭わずその旨を記載する傾向にあるが、その傾向からすると、何ら言及のない本脚注においては、レムゴ原稿においてもロンドン原稿と同様の綴り(すなわち、人名表記の綴りとしては間違いである Jagen Andasen)が記載されていたと推測しうるが、これも1つの可能性以上のものではない。

(以下次号)

---

[1] 「ドームによるケンペル『日本誌』の編集について(1)— 総説及び第1巻の分析(その1) —」(大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2010 ドイツ啓蒙主義研究11』、2011年、S.1-22)。なお本号で使用する略号、あるいは「新第1章」等の意味については、前号掲載の略語表及び脚注等を参照。

[2] 原文において Kattai ではなく Katai と綴られている。

[3] この sie は英訳」(die englische Uebersetzung)を指す。

[4] 正確には引用しきれなかったが、ここの beydes の y には、原文ではウムラウト記号がついている。念のため、Heutiges Japan 版の当該箇所を示す。

[5] 『研究社 新英和大辞典』第5版 1982年、p.1256.

[6] http://catalogue.bl.uk/F/?func=file&file_name=login-bl-list(最終確認:2012年5月2日)

[7] Michel, Wolfgang: *Johann Caspar Scheuchzer (1702-1729) und die Herausgabe der History of Japan*. In: *Asiatische Studeien/Étude Asiatiques*. LCIV, 1, 2010.

[8] Engelbert Kaempfer, *De beschryving van Japan* (tr. J.R. de Joge) Amsterdam, 1733(リプリント版、雄松堂、2006)p.18. このリプリント版は1733年版のオランダ語訳によっているが、オランダ語訳初版は1729年に出版されている。

[9] Kaempfer, Engelbert: *Heutiges Japan*. Herausgegeben von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel. In: Engelbert Kaempfer Werke. Bd. 1/2, München (iudicium), 2001.S.41. 以下、本論文において同書は Heutiges Japan 1/2 (Kommentarband) と略記する。

[10] 引用文の中の括弧書きは原文のままである。括弧内の HJ は History of Japan の略号でショイヒツァー版を指し、GBJ は Geschichte und Beschreibung von Japan の略号でドーム版を指す。